

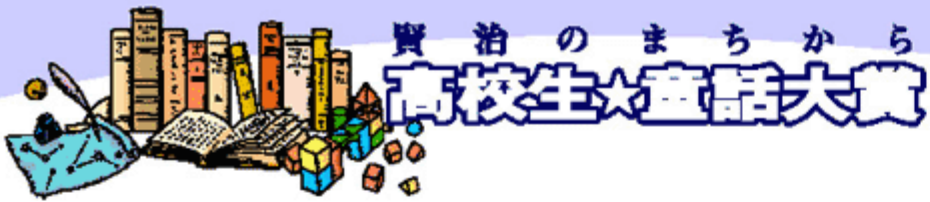
第 10 回 優秀賞(銀賞)受賞作品

「アルクの大冒険」

京都府 京都すばる高校三年 坪井 みづき



賢 治 の ま ち か ら
全国高校生★童話大賞



優秀賞〈銀の星賞〉

『アルクの大冒険』

京都府立京都すばる高等学校三年 坪井 みづき

古い本が猛スピードで走っている。走る本をあなたは見たことがあるだろうか？私はなかった。しかし、日本の片隅でこの物語は始まる。逃げている本の名前は『アルク』という。なぜアルクは今走っているのか？気になるだろうから教えてあげようと思う。

日本のある家の本棚の片隅に埃^{ほこり}をかぶった図鑑^{ずかん}があった。それがアルクだ。

埃の量からもう何年も読まれていないのがわかる。しかしよく見ると随分と大切に読まれた形跡がある。そう、アルクは三年前までは持ち主のサトシ君の宝物だったのだ。しかし、ここ何年かは、サトシ君も学校の勉強が忙しくて、アルクや他の本のことなんか忘れてしまっていた。アルクはそんなサトシ君をいつも本棚から見守っていた。

ある時、サトシ君は部屋の片づけをしていた。処分するものを段ボールに詰め始めて三十分後本棚に近づいてきた。本たちは自分たちも捨てられるのではとドキドキしながらサトシ君の様子を見ていた。すると、本たちのいやな予感当たった。サトシ君は本の何冊かを手に取り段ボールへと入れているのだ。アルクはそれを静かに見届けていたが、サトシ君の手はアルクにも伸びてきた。そして、アルクも段ボールに静かに入れられた。

その日の夜、アルクは段ボールから飛び出してきた。アルクには昔からの夢があったのだ。それは、フランスへ行きルリユールにより本としても一度生まれ変わることに。そして、生まれ変わった新しい自分を見て、もう一度サトシ君に大切に読まれたい。そう決意してアルクの長い旅が始まった。



とまあ、こんな感じで「アルクの物語」は始まった。勢いよく窓から飛び出したところまでは良かったが、落ちた瞬間に猫にぶつかり冒頭に戻る。冒険は始まる前に終わるのではないかと心配になってしまう。

アルクは、私がこうして説明している間も猫に追われてすごいスピードで走っている。猫としても大切な睡眠を妨害されて怒っているのだらう。でも、私としては、もうそろそろアルクには猫とお別れしてもらって、ちょっと旅に出てほしいため、アルクに手を貸そうと思う。

「パンッ」

と私が手を叩くと、猫は急に立ち止まり、今まで走ってきたところを戻り始めた。それに気づいたアルクも走るのを止め、不思議な顔で立ち尽くしていた。

そういえば私の紹介がまだだったかな？私は人々から「神様」と呼ばれる存在だ。しかし実際の神様は私の父だから、私自身名前はなし。私は、一応神の子だからさっきもお見せした通り、ある程度のことは思いのままに動かすことができる。アルクが今こうやって走れているのも、私がそうさせたからだ。すごいだろ？まあ、普段は疲れるからあんまり使わないのだが。とりあえず、私は、サトシ君の部屋のたくさんの本たちに頼まれて、アルクをフランスまで連れていくという仕事を引き受けた。「神様」としての初任務だ。だから気合を入れてきたのに、こんな調子で無事任務を遂行できるか不安になってきた。

「お前が助けてくれたのか？」

アルクが私に向かって聞いてきた。どうやら説明している間に見つかってしまったらしい。

「アルクの友達のたくさんの本たちに頼まれてね。これから私があなたの夢を叶えるまでをお手伝いします。」

と伝えた。自分の名前を知っていることにアルクはびっくりしていたが、それを無視して歩き始めた。すると急いでアルクはついてきた。

あれから無言で一時間ほど歩いて、空港に着いた。近くに空港があつてよかった。皆さんは、神様なんだからまた手を叩いて、フランスまで瞬間移動してしまつたら良いと考えているかもしれないな。しかし、人間（今の場合本だが）は甘やかしてはいけないのだ。それに、自分の夢は自分の力で叶え



てこそ意味があるのであり、人の力を借りてしまつては達成感も何も半減してしまふ。まあ、実際のところ、力を使うのが面倒なだけだが。

空港に着いて、私はアルクを私の鞆に強引に入れ、飛行機に乗った。その間アルクがぎゃあぎゃあ文句を言っていたがそれは華麗に無視をした。

飛行機に乗ること十三時間、やっとでフランスに着いた。飛行機が降りて、静かになった鞆を叩いてアルクを起こしてやる。ここからはアルクの出番だ。というか、もうそろそろアルクが何かしないと私の話になつてしまふ。

鞆から出されたアルクは、自分が居るところがフランスであることを知り

「……ありがとう」

とボソツと私につぶやいた。私は聞こえないふりをして、先を急がした。言い忘れていたが、アルクに対して私が手を貸せるのは三六時間だ。つまり、タイムリミットまであと二三時間を切っている。そのことをアルクに伝えると、顔を真っ青にして焦り出した。時間のことを言うのを忘れていたのは私だったので、とりあえず近くに住むルリユール職人を捜すことを提案した。アルクは、その提案に聞き従い、地図を捜しに歩いた。私は少し後ろをついて歩き様子を見ることにした。さすがにアルクの姿を人間に見られてはマズいため、人間には見えないようにしている。アルクは、やっと日本で言う交番に着き、地図を見つけることが出来たようだ。しかし、どこを捜してもルリユール職人の家は見つからない。そこで、アルクは私の方をチラッと見た。私は、皆が思っているほど優しくないので、そこは知らないふりをしていた。すると小さな声で

「助けてくれ。」

と言ってきた。

「人にモノを頼む時の態度がそれですか？」

と意地悪そうに聞いたら悔しそうに

「助けてください。お願いします。」

と早口で頼んできた。手助けをするのはまだ早いと思っていたが、こうやって頼んできている姿がかわいくて、力を貸すことにした。

でも、私自身初めての外国で何をしたらいいのか悩んでいると、公園のベンチに忘れられたのか、大きな本が置いてあるのを見つけた。その本は使い

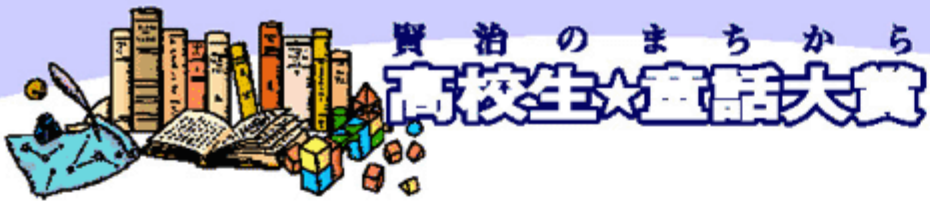


こまれていたが、表紙は新しいものが使われており、一目でルリユールによって作り直されたものと分かった。私がそれに気づきアルクに声をかけようとするよりも先に、アルクはその本のところまで走って行っていた。私はすぐに後を追いかけて、アルクにしたと同様その本にも魂を与えた。その本は『マロン』といい、お菓子のレシピが書かれている本らしい。本に対して可愛らしいというのも変だが、マロンは女の子らしくて、とても可愛かった。アルクも自分が自己紹介をしている間ずっと顔を赤くして照れていた。きつとこれがアルクの初恋だろう。アルクの自己紹介が終わるとマロンは自分のことについて話し始めた。

「私は、ケーキ屋さんのおじいさんが、考えた新しいケーキのアイデアを書いていって生まれた本なの。でも、そのおじいさんは五年前に死んじゃった。最期まで私を枕元に置いて、思いついたアイデアを書き込んでくれたわ。おじいさんが死んでから私は、すぐに売り飛ばされちゃった。おじいさんは実は有名なケーキ職人だったらしいの。だから、そのアイデアが詰まった私はとても高値で取引されたわ。最初のうちはちやほやされて嬉しかつたけど、私を買ってくれたどの人も私を大切に扱ってくれなかった。内容だけが需要とされていた。だから、ずっと寂しい思いをしていたわ。でも、去年ある女性が私を買ってくれたの。そのころには私はもうボロボロでほとんど価値がなかった。なのにその女性は高いお金を出して私を買ってくれたの。聞くとその女性はおじいさんの孫娘で、ずっと私を捜していてくれて、お金を貯めてやっとで見つけた私をすぐに買ったらしいわ。それですぐにボロボロの私をルリユール職人の所に持って行ってきれいに生まれ変わってくれた。おじいさんが死んでしまってから、私の存在を大切に扱ってくれる人なんていなかったから今とっても嬉しいの。」

マロンは満足気に話し終えた。アルクは彼女の話を目をウルウルさせながら聞いていた。そんな私も、こんな世の中にも本を大切に作る気持ちを持つ人間が居ることに感動した。

そこで、マロンを生まれ変わってくれたルリユール職人について聞こうとした時、少し離れた所から二十代の女性がこちらに向かって走ってきているのが見えた。私はすぐにその女性がマロンの持ち主だと気づきマロンを元に戻



した。走ってきた女性は『アリス』といい、案の定マロンの持ち主だった。アリスは自分の大切な本を私が持っているのを見て、

「その本私のなんです。友達と喋^{しゃべ}っていたら置き忘れちゃったみたいで……。」

と息を切らしながら言っている。その姿から、マロンを探し回っていたのがよくわかる。本当にマロンはアリスから大切に想われているんだと実感した。

「失礼とは思ったんですが、この本を少し見させていただきました。とても古い本なのにとてもきれいに補修されていますね。もしかしてルリユール職人の所へ持って行かれたのですか？」

とアリスに聞いた。するとアリスは嬉しそうに

「ありがとうございます！ この本は私の祖父の形見で私の宝物でもあるんです。それで去年、私の家の近くにルリユールのお店があるのでそこに持って行ったんです。日本の方なのにルリユールをご存知なんですね。」

と答えてくれた。

「私もルリユールで生まれ変わらせた本があるんですよ。もし良ければそのお店まで案内してもらってもいいですか？」

と聞いた。アリスはこの申し出に快く承諾してくれ、ルリユールのお店まで連れて行ってくれた。お店に着くまでの道中でマロンから聞いたのと同じ話をアリス視点で話してくれた。その話を聞いていて、私の本に対する考えは少しずつ変わっていくのを感じた。お店に着いてアリスとマロンに別れを告げると早速入店した。そこには優しそうなおじいさんが一人本を読んで座っていた。

「こんにちは、今すぐに頼みたい本があるのですが。」

と私は普通の姿に戻したアルクを店主に見せた。すると店主はアルクを私から受け取り眼鏡をかけて調べ始めた。ある程度見終わった後

「今からすぐに始めても一ヶ月はかかる。それでもよければ引き受けよう。」

と言った。まさかルリユールの作業に一ヶ月もかかるとは思ってもしなかった。明らかに私の調査不足だ。こんなのを父に知られてしまったら……考えるのも恐ろしい。でも職人さんがそう言っているのだから疑うこともでき



ないし、とりあえずお願いすることにしよう。タイムリミットはあと十八時間。そうだ！今の時点でこのタイマーは止めて、また作業が終わり迎えに来た時点からタイマーをスタートさせよう。少しずるいかもしれないが、それでも良いことに私が今決めた。だって今の私は「神様」だし……

とりあえず、私は一ヶ月間暇なため天界へと戻った。ちょっとした臨時休業だな。まあ、今まででもずっと休みだったようなものだが。

――一ヶ月後――

今まで本とか読んだことがなかったが、私はこの一ヶ月間、ずっと読書に励んでいた。ほんとは読んでみると意外に面白くてハマっていくものだと思いついた。今なら、本を大切に作るアリスの気持ちも理解できる。この一ヶ月の間でアルクも出来上がったようなので、早速フランスのルリユールのお店に向かった。

ルリユールのお店で渡されたアルクを見た私は息をのんだ。元々、乗り物の図鑑だったアルクの表紙は、青い空をバックとした大きな飛行機のページを加工していて色鮮やかなものとなっていた。そして、中のページもきれいに留め直されていてルリユールの技術に感動した。姿形を元通りにするだけなら、神様である私にとって朝飯前のことだが、古くなった物に新しい命を吹き込んでこれだけの物に生まれ変わらせるとは人間も大したものだ。アルクに魂を入れてから

「おはよ」

と声をかけてやった。するとアルクは一瞬何が起きたか分からないような顔をした後、はっと気付いたように

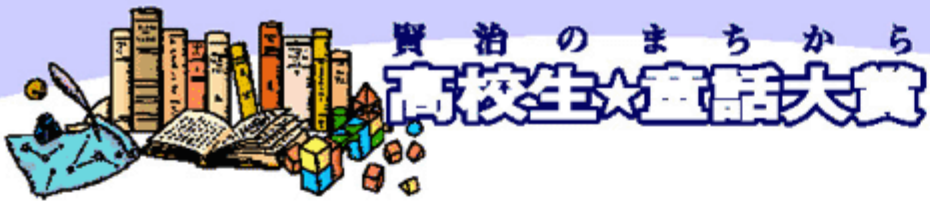
「おはよっ、それより俺どうなった？」

と聞いてきた。そのため鏡の前にアルクを持って行き姿を見せた。すると「……うわあ！俺じゃないみたいだ。」

と感動の声をあげた後、

「今の俺だったらサトシ君に捨てられないかな……？」

と寂しそうに呟いた。私は店主に代金を払いながらその呟きに気付かないふりをして、



「よしっ、これであなたの夢は叶いましたね。では日本へ帰りますか。」と先を促した。それに応じてアルクは自分から私の鞆に入った。

鞆に入ったアルクを私は引っぱり出した。自分で歩けるくせに私に持ってもらおうなんて、百年早い。鞆から追い出されたアルクはしぶしぶ私の後に付いて来た。少し歩くと空港を見つけた。来た時と同じように、鞆にアルクを入れて飛行機に乗った。飛行機に乗ること十三時間。タイムリミットまであと一時間（ずるを犯したことは私の父には秘密で）。かばんからアルクを出すと私は他にやり残した事が無いかアルクに聞いた。アルクは黙って首を振ってサトシ君の居る家に向かって足を進めた。それを今度は私が静かについて行った。お互い無言で歩いてサトシ君の家の前に着いた。私は誰かとの別れなんて今まで経験したことがない。だからこんな時どう接したら良いのか分からなかった。短い間だったけどアルクと居て楽しかったし……と悶々と考えている時、下の方から声が聞こえた。アルクに

「何か言いました？」

と聞くと、顔を真っ赤にして

「こんな俺の夢をかなえてくれてありがとうな。本当はサトシ君に捨てられるのが怖くて、でも自分ではどうすることもできなくて……。そんな時お前が現れてくれたんだ。本当に短い時間だったけどありがとうな。」と泣きながら伝えてきた。

「そんな……私こそ初の仕事で大したこともできずに申し訳ありませんでした。でもアルクだったからこうやって無事に終わることができたんですよ。それに私はアルクのおかげで本へ興味を持つことができました。なかなか本って良い物ですね。あと、先程は聞こえないふりをしていましたが、今の生まれ変わったアルクを見たらサトシ君もきっとアルクを捨てることはないですよ。」

私はつい、アルクにつられて私ではないような台詞せりふを言ってしまった。しかも言わなくてもいいようなお節介まで言ってしまった、本当に私はどうしたのだろう。

気付いたら私も涙を流していた。

しかし、こうしている間にも時間は刻々と過ぎるもので、タイムリミットまであとカップラーメンが出来上がるまでの時間となった。ちなみに三分で



ある。こうやってふざけている場合ではないのだ。私は最後の仕事である『アルクを元に戻して部屋の段ボールの中へ帰す』ことをしなければならぬ。そのためにアルクを持ち上げると最後にアルクは

「ありがとう」

と言って目をつぶった。目に涙をためながら、私はすぐにアルクを元に戻し、上へ放り投げた。これでアルクは段ボールへ戻っているはずである。

今回の仕事で私は本から人間の心を教えられてしまった。もしかしたら父は私に「心」について知る必要があることを分かっていた、私にこの仕事をさせたのではないだろうか？もしそうだとしたら、まんまと父の目論見^{もくろみ}にはまってしまったことになる。悔しいが、まあ楽しかったし良しとしよう。

そういえば、アルクのあれからの話をしていなかったな。アルクがサトシ君の部屋に戻った翌日、アルクを見つけたサトシ君は驚いて中を確認した。するとサトシ君が小さいときに書いたであろう自分の名前を見つけて自分のものだと確信した。サトシ君は嬉しそうに、小さい頃にしていたようにベッドで夜寝るまでアルクを読んでいた。その姿は私から見てもとても微笑^{ほほえ}ましいものであった。

後で分かった話だが、段ボールに詰められた本たちは、ただ棚の掃除のために一時的に段ボールに入れられただけだった。それを早とちりした誰かが私に頼んできたのだ。全く迷惑な話だが、アルクの幸せそうな姿を見られたから、許してやることにする。

神様の権限を乱用して、サトシ君の二十年後も見てみた。すると旅客機のパイロットとして働くサトシ君の姿と、サトシ君の部屋の枕元に大切に置かれたアルクの姿があった。

アルクが生まれ変わったからサトシ君はアルクを読むようになり、最終的にパイロットとなったのかは定かではないが、私の仕事がこうして一人と一冊の人生（本生？）に関われた事に、何とも言えない達成感を感じた。

まあこうして無事アルクの冒険は終わった。後半からはアルクの冒険というよりは私の日記みたいになってしまったが、私としても良い経験ができたし、めでたしめでたしということだ。



賢治のまちから 高校生★童話大賞

もしかしたら夢を叶える手助けに私があなただの所へ行くかもしれないな。
その時はよろしく。でも、やっぱり夢は自力で叶えてこそだから、ある程度
は自分で頑張ってほしい。

あつ、今、また新しい仕事が入った。ということで私はここで失礼する。
では、またどこかで……

—おしまい—